

日本スポーツ社会学会会報

Vol. 40

Sport Sociology

【目次】

・日本スポーツ社会学会第14回大会プログラム	... 1
・研究委員会報告（研究プロジェクトについて）	... 5
・新刊情報 Sport and the Irish: Histories, Identities, Issues	... 8
・新刊情報 『スポーツ文学評論』	... 11
・研究活動通信 マスターズ甲子園 2004	... 13
・海外学会報告 2004 北米スポーツ社会学会（NASSS）	... 18
・編集後記 / 事務局住所	... 21

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
事務局 京都教育大学 2005年3月

第14回日本スポーツ社会学会東京大会プログラム

2005年3月28日(月)

11:00 12:00 理事会 G201 教室

11:30 受付

12:30 一般発表

- A G203 教室(2F) 司会 森川 貞夫(日本体育大学)
公共スポーツ施設利用者に関する調査研究(1)
~SSFスポーツライフ・データの二次分析~ 澤井 和彦(東京大学)
公共スポーツ施設利用者に関する調査研究(2)
~『常連』とはどのような人たちなのか?~ 中澤 篤史(東京大学大学院)
公共スポーツ施設利用者に関する調査研究(3)
~スポーツ実践とジェンダー~ 新 雅史(東京大学大学院)

- B G204 教室(2F) 司会 佐伯 年詩雄(筑波大学)
「子どもたちの不在:2004年アテネオリンピック大会開会式のパフォーマンス」
舛本 直文(東京都立大学)
スポーツ報道と新聞広告の新しい関係 ~アテネ五輪をケーススタディーに~
左近允 輝一(朝日新聞)

- C G206 教室(2F) 司会 菊 幸一(筑波大学)
紛争後の社会の民族融和とスポーツ -ボスニア・ヘルツェゴビナにおける取り組みから
岡田 千あき(大阪外国語大学)
ガーナにおける近代スポーツのローカル化 坂本 幹(筑波大学大学院)
国際労働力としてのフィリピン人ボクサーに関する一考察
-サスキア・サッセンの議論から- 乗松 優(九州大学大学院)

企画委員会セッション G501 教室ほか

14:15 17:15 『オリンピックをスポーツ社会学の言葉で語ろう』

- ・ 内容 :バズセッション
- ・ テーマ:オリンピック
- ・ スケジュール:

イントロダクション グループづくり

グループ討論

ロイ先生による『ロイの言葉で語るオリンピック』

まとめ 平野秀秋日本スポーツ社会学会会長(法政大学)

17:15 - 18:00 **総会** G501 教室

18:20 - **懇親会** 茗溪会館

2005年3月29日(火)

9:00 - 10:30 **一般発表**

- A G203 教室 司会 杉本 厚夫(京都教育大学)

海外セッション テーマ; 脱境界/再境界するスポーツ、身体、文化

立脚姿勢、軍隊、国際政治

ハラルド・クラインシュミット(筑波大学)

複合現象としてのスポーツグローバリゼーション 海老島 均(びわこ成蹊スポーツ大学)

Sports and State-making: Some phenomenological reflections on the nature of
"competition" Hartmut Behr (University of Jena)

同窓会で運動会する「再帰的身体」の時空間的構築 黄 順姫(筑波大学)

- B G204 教室 司会 北村 薫(順天堂大学)

市民マラソン大会参加者の Pull 要因と参加満足に関する研究 - 尚巴志ハーフマラソンの
ケーススタディ 伊藤 克広(神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程)

市民マラソン大会に参加する県外ランナーの Pull 要因と支出傾向

松本 仁美(神戸大学大学院総合人間科学研究科博士前期課程)

- C G206 教室 司会 高橋 豪仁(奈良教育大学)

イギリスのボランティア政策におけるユースクラブの役割

- 政策課題の共有化における中間組織の機能 - 前田 博子(鹿屋体育大学)

不登校生徒に対するホースセラピーに関する研究 - N学園の事例研究 -

伊藤 嘉人(日本体育大学)

フロー体験が深化する過程における相互作用

迫 俊道(広島市立大学)

10:30 - 12:00 **一般発表**

- A G203 教室 司会 野川 春夫(順天堂大学)

総合型地域スポーツクラブの育成過程に関する社会学的考察 後藤 貴浩(熊本大学)

アウトドア・スポーツの風土論的考察 前田 和司(北海道教育大学旭川校)

スポーツと社会的包含 ~グラスゴーの貧困地域におけるスポーツ関連サービスを事例
に~ 鈴木 直文(University of Glasgow, Department of Urban Studies)

- B G204 教室 司会 矢島 ますみ (明海大学)
対校戦イデオロギーとしての「精神野球」の機能 - 飛田穂州の言説
 白石 義郎 (久留米大学)
生成する身体 - 世阿弥の修行論を中心に 服部 直 (龍谷大学大学院社会学研究科)
日本体育会による公園の運動場化に関する一考察
 小坂 美保 (奈良女子大学大学院人間文化研究科)

- C G206 教室 司会 リー・トンブソン (早稲田大学)
大相撲における女人禁制の研究 1 - 大相撲観戦者の男女比 -
 了海 諭 (東海大学)
大相撲における女人禁制の研究 2 - 観戦者の意識に関する事例 -
 山本 恵弥里 (東海大学)
大相撲における女人禁制の研究 3 - 外国人観戦者の意識 - 生沼 芳弘 (東海大学)

12:00 - 13:00 若手研究者懇談の集い (研究委員会主催)

13:00 - 14:30 一般発表

- A G203 教室 司会 山下 高行 (立命館大学)
スポーツの社会学に「都市」を埋め戻す - 空間論と生活論を手がかりに -
 田中 研之輔 (日本学術振興会特別研究員/一橋大学)
エスノメソドロジーの武術研究への適用可能性について
 倉島 哲 (京都大学人文科学研究所)
- B G204 教室 司会 東元 春夫 (京都女子大学)
アジアにおけるスポーツ振興：政策と社会文化的特性 山口 泰雄 (神戸大学)
イタリアスポーツの動向 ~UISPの活動について~
 依田 充代 (日本体育大学女子短期大学)
四国における野球独立リーグ創設の意味 小野寺 直樹 (横浜国立大学大学院)
- C G206 教室 司会 清水 諭 (筑波大学)
**2002年サッカー・ワールドカップとの意外な出会い - 「にわかファン」「長年ファン」
 の関心事、無関心層の憂鬱** 片山 美由紀 (東洋大学社会学部)
**スポーツイベントの社会的効果について 「サッカーワールドカップ日韓大会に見る社会
 的効果と2011年ワールドカップへの課題」**
 西尾 建 (日本大学大学院総合社会情報研究科)
オリンピックと外国人・日本人イメージ 向田 久美子 (清泉女学院大学)

14:40 - 17:00

課題研究 A G203 教室

コーディネーター： リー・トンプソン（早稲田大学）

**テーマ：ドキュメンタリー映画（「6月の勝利の歌を忘れない
～日本代表、真実の三十日間ドキュメント～」）を観る（2）**

本誌 5～6頁を参照

課題研究 B G204 教室

コーディネーター：松田 恵示（東京学芸大学）

テーマ：スポーツとことば（2） 古館伊知郎とスポーツ実況 - その背景と影響 -

司 会： 松田恵示（東京学芸大学）

パネラー：清水泰生（臨南寺東洋文化研究所）

岡村正史（県立須磨東高校）

梅津顕一郎（呉大学）

コメンテーター：ウィリアム・ケリー（エール大学）

井上俊（甲南女子大学）

本誌 6～7頁を参照

研究委員会からのお知らせ

松田恵示（研究委員長）

第13回の学会大会が近づいてきました。大会では、この2年間、研究委員会が課題研究として取り組んできた成果をもとに、「スポーツと表象」を大きなテーマとした2つのシンポジウムを開きます。以下に、それぞれのシンポジウムの概要を掲載いたしますので、どうぞ奮ってご参会ください。

また、学会大会期間中に、若手研究者の懇談会を開催する予定です。学会にとっては、若手研究者が活発であることが望ましいわけですが、一方で、若手ゆえに、人的、制度的ネットワーク等様々な意味での「研究資源」を、豊富に活用するまでにいたっていないといったこともあるようです。若手の呼称は、もちろん自称が基本です。こちらの方にも、また奮ってご参会くださいますようお願い申し上げます。

課題研究 A

コーディネーター：リー・トンプソン(早稲田大学)

テーマ：ドキュメンタリー映画を観る

課題研究「ドキュメンタリー映画を観る」の第2回目で、岩井俊二監督の「6月の勝利の歌を忘れない」を観ます。220分の長い映画であり、セッションではその一部、約一時間しか観ることができません。そこで、できることならなるべく事前に全体を観ておくことをお勧めします。レンタルでも手に入ると思います。

以下、販売元のポニーキャニオンのサイト(<http://www.ponycanyon.co.jp/video/rokugatsu/>)から映画の紹介を抜粋します。

「キャンプ地・静岡「北の丸」集合から、決勝トーナメント・トルコ戦後の解団に至るまでの30日間に密着。日本中が大興奮の最中、TV・新聞・雑誌などでは決して知ることの出来なかった代表チームの真実がこの映像の中に存在する。非公開トレーニング、ミーティング、ロッカールーム、そして宿舎での休息。試合では見られない選手の意外な一面。そして全ての“鍵”を握る男、監督：フィリップ・トルシエの“素顔”。この数十時間にも及ぶ非常に貴重な映像記録をもとに、日本映画界の俊英と言われる映画監督 岩井俊二 が構成・編集を手掛け、魅力ある長編ドキュメンタリーと仕上がった。」

映画は「(財)日本サッカー協会公式映像記録」となっています。「公式映像記録」とは「(財)日本サッカー協会は、サッカーの普及、育成、強化を進める施策の一環として、1999年以来、日本代表の活動を映像として記録しています。記録された映像は、指導者養成、ユース年代の選手育成、強化等の現場で、資料として活用されています。今回は激動の一ヶ月間を“日本サッカーの歴史的映像資料”を形として残したい！という願いの中、承諾得て、リリースが決定致しました。サッカーファンならずとも感動せずにはいられない作品になったと自負しております。皆様、この

『DVD』をご覧になり、サポーターの一人として、もう一度“あの興奮”を楽しんでみませんか？」
2本のDVDからなっています。Vol.1 は108分であり、次のように紹介されています。「5月21日、選ばれた23人が最終キャンプ地・静岡「北の丸」に集合、最後の調整に入った。スウェーデン代表とのフレンドリーマッチを経てチームはいよいよ臨戦体制に入る。練習、ミーティングの繰り返しの中、次第に高まる緊張感。6月3日、決戦の地、埼玉へ移動。ベルギー戦当日の最終ミーティング、トルシエ監督が運命のスターティングメンバーを告げる…」

Vol.2 は112分で、その内容は以下の文で説明されています。「ロシア戦当日の朝、日課の散歩をしながら選手たちはそれぞれに試合に向けての集中を高めていく。決勝トーナメント進出に向けてどうしても勝ちたい一戦が始まった。前半を0-0で終えたハーフタイムのロッカールーム、中田英寿が激しい口調で切り出した…」

ファンではない方にとっては一見して取っ組みにくい内容かもしれませんが、けっしてそんなことはありません。コーディネーターの私も、実は知らない選手が多いです。しかし、様々な立場からの見解こそ面白い議論を導くはずです。「3月の大会の議論を忘れない」と振り返られるセッションにしたいと思います。

セッションの進行は前大会の形式を踏襲します。前大会のプログラムから抜粋します。「映画を鑑賞した後、ディスカッションを行います。そこでは、コメンテーターを設定せず、参加者に自由な意見と感想を述べてもらいます。描かれた内容について、あるいは作品としてのコメント、また、監督の意図や策略、映画で提示されたものと違う捉え方など、観点は多様にあるでしょう。学会のシンポジウムやテーマセッションは、フロアーを引き入れたディスカッションが欲求不満に終わることは多々あるように思います。今回は、映画のあとの数十分間を参加者に解放したいと思っています。積極的な発言を期待しています。」

課題研究B 「スポーツとことば(2)」

テーマ： 古館伊知郎とスポーツ実況 - その背景と影響 -

パネラー： 清水康夫 (臨南寺東洋文化研究所) / 岡村正史 (兵庫県立須磨東高校)
梅津顕一郎 (呉大学)

コメンテーター：ウィリアム・ケリー (Yale University, USA) / 井上俊 (甲南女子大学)

司会： 松田恵示 (東京学芸大学)

司会 松田恵示 (東京学芸大学)

「スポーツとことば」をテーマとした課題研究の2年目は、スポーツ実況中継における古館伊知郎というエポックメイキングを対象に「スポーツ文化とことばの相互変容」という問題について議論してみたい。

社会現象としてのスポーツを捉えようとした場合、「スポーツを見る=見るスポーツ」の占める割合が決して小さくないことは誰しもが認めるところである。そこで、スポーツ実況中継における「古館伊知郎」という問題を立てることで、見る体験としてのスポーツに焦点を絞り、スポーツとことばの関係について検討してみることが課題である。

スポーツの実況中継は、ラジオに始まりテレビへと舞台を移す中で、大きくスタイルを変容させている。それは一方で、新しいメディアに応じてことばが変容する過程でもあり、他方では、実況中継によって新しく様式化され普及する「スポーツ用語」が、日常生活に還流していく過程でもあった。しかし、こうした一般的なプロセスに回収されない出来事として見いだすことができるのが、古館伊知郎とプロレス中継の問題である。ここには、プロレスあるいはスポーツとことばのある特殊な関係を見いだせる、というのが、課題研究に取り組んだ私たちの第一の主張である。その具体的な中身について、シンポジウムを通して報告し議論する中で、昨年度行った「制度としてのスポーツ」という視点ではなく、「経験としてのスポーツ」というもう一つの視点から、スポーツとことばの関係を捉えることの面白さを示してみたいというのが、第二の主張である。

当日は、まずスポーツ実況中継の変化を映像資料によりフロアーのみなさんと確認するとともに、その言語学的変化の特徴について検討することから始めてみたい。その後、こうした変化と古館伊知郎の関係を社会的なパースペクティブへと変換させつつ、「ことばとスポーツ」問題の1つの課題を明らかにし、「30分一本勝負」の議論をパネラー間で行う。その後、コメンテーターの先生方からご意見をいただき、フロアーのみなさんを交えて議論を深めていくことを計画している。

パネラー 清水泰生 (臨南寺東洋文化研究所)

スポーツ実況中継が一昔前とは違ってきたと言われている。どうか変わったのであろうか。1968年メキシコオリンピックの日本代表戦と2005年W杯予選日本対北朝鮮の実況を例に、アナウンサー等の言葉の使い方がどう変わったのか、また現在の実況中継の特徴はどのようなのかなどについて言語学の専門からまずは述べてみたい。

パネラー 岡村正史 (兵庫県立須磨東高等学校)

ドラマをスポーツのように実況することで始まった虚実皮膜の世界たるプロレス実況は古館伊知郎においてひとつの頂点を迎えた。古館は多彩な言語によってプロレスに躍動するイメージを与えたが、後にはプロレス文化の変容によって古館とプロレスの間に齟齬が生じていく。一世を風靡した力道山時代から、格闘技ブームの中に埋没する今日までの50年のプロレス史を古館の実況に凝縮させることも不可能ではない。

パネラー 梅津顕一郎 (呉大学)

古館伊知郎によるプロレス実況が絶頂期にあった80年代前半期は、消費文化や情報化社会の展開の上でも、ターニングポイントとなった時代である。＜ポストモダニズム＞が、ある意味で時代のモードと化し、新人類やおたくたちによるサブカルチャーが、ジャーナリズム、アカデミズムの一部、そしてマーケティング等でもはやされるなか、プロレスはこれら一連の若者サブカルチャーの文脈に位置するものであり、その主役のひとつが＜古館節＞であったのだ。報告では、こうした時代背景に着目し、古館実況を主役に押し上げた、文化記号的時代背景を探る。

【新刊情報】

“Showcase of Sport in Ireland” ?

山本ヤヤ真由美

Institute of Sport & Leisure Policy,
Loughborough University

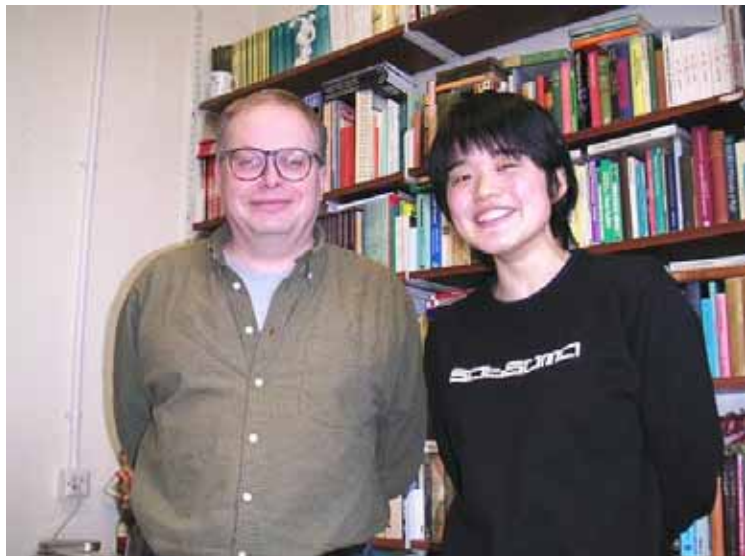
Alan Bairner (ed.) (2005) *Sport and the Irish: Histories, Identities, Issues*,
University College Dublin Press: Dublin.

アイリッシュ・スポーツの研究は、日本では未だ多くの人には無縁の、そして EU の周辺の地域としての出来事の範疇に入るであろう。しかしアイリッシュスポーツは長い間、イングランド・スポーツとアイルランド固有のゲーリック・スポーツとの対抗の中で独特の形成を果たしてきたものであり、おそらくこのような歴史を見ていくことは、グローバル化の進む現代社会の中で、改めて多様性や多文化というものは何かを考える上で重要であろう。この意味でアイリッシュとスポーツとの関係を歴史的、政治的、社会的なコンテクストから包括的に考察した、正に「アイルランドにおけるスポーツのショーケース」とも言える新刊が出版されたのでここで紹介したい。

本著は、昨年度の学会大会にも顔を覗かせた、ラフバラ大学(Loughborough University, UK)のスポーツ社会学リサーチ・グループ(Sociology of Sport Research Group)アラン・ベアナー准教授(Dr. Alan Bairner, Reader)が編者となり、他14名のアイリッシュ・スポーツ研究者が個々の学問的視点から寄稿したものである。ここでは、筆者が編者であるベアナー博士との(楽しい!)ディスカッションを交えて得た、本著そもそもの狙いとその内容、とりわけアイルランドの政治・経済的現状と本著との関わりを紹介し、新刊情報としたいと思う。ちなみに、本編著はベアナー博士のアイルランド・スポーツに関する著書である、*Sport, Sectarianism and Society in a Divided Ireland* (1993: Sugden, J.との共著)と*Sport, Nationalism and Globalization: European and North American Perspectives* (2001)に続くものである。

(写真は、ベアナー氏と筆者)

まず、本著の構成であるが、本著はサブタイトルでもある、歴史、アイデンティティ、諸論点の3部より成り立っている。編者のベアナー博士によると本著は、「アイルランドとスポーツ、もしくはアイリッシュとスポーツに関する包括的な文献がこれまで存在しなかった」ため、その欠落を埋めるべくこのような構成のもと、



アイリッシュ・スポーツ研究者だけでなく、知的興味・関心を多様に持つ、様々な学問分野の研究者が集まりアイルランド/アイリッシュとスポーツの問題点を広範に取り上げることがめざしたとのことである。

序論にもあるように、「アイルランドにおけるスポーツの歴史的、社会的、政治的な側面を各々扱った文献、もしくは、アイルランドと Britain との関係性を扱った文献は益々増えてきている」(p.2)。しかし、この二分化された社会(歴史的 社会的、アイルランド共和国 北アイルランド、ナショナリズム ユニオニズム:統一主義)において、いかにスポーツがその形成に関わってきたかを包括的に論ずることは難しい。外面的には一見「寄せ集め」的な印象を受けそうである。だが、本著全ての章には共通して、「アイルランドとは何か?」、「アイリッシュとは何を意味するのか?」というパワフルな問題提起が貫かれており、この問いのもとに本著の包括性が一つのまとまりとして表れている。

さて、以下簡単に各パートで目についた特徴的な内容を紹介することとしたい。第1部は詳細な歴史的資料を元にアイリッシュ・スポーツの歴史が分析されている。例えば、アイリッシュ移民のコミュニティ形成にゲーリック・スポーツ(Gaelic Sport) がどのように機能してきたかがここでは論じられている(Paul Darby, Ch.6)。この章では、18 - 19 世紀に多く移民を排出してきたアイルランドと、そのアイリッシュ移民を受け入れてきたアメリカのある特定の地域との間の人種差別問題、そして2,3世のアイリッシュ移民にとってのアイデンティティ形成におけるゲーリック・スポーツへの関わりを、長期に渡る歴史的な視点から取り扱っている。そして、ボストンにおける GAA(Gaelic Athletic Association)の組織化とゲーリック・フットボール、カモーギ、ハーリング(Gaelic football, camogie, hurling)にどのような形にせよ参加することが、故郷と新地との「継続性」、そしてエスニック、ナショナル・アイデンティティの形成にいかに関与し、また混乱が生まれてきたかを分析している。インタビューを交えた質的歴史研究としてとても興味深い章であるが、これに社会科学観点(例えば帝国主義やヘゲモニー論との関係)が入ると、更に有用な章になるであろうと思われた。

第2部は本著の根幹的議論と関わり、各章で提起されている「アイリッシュとは何か」という問いをそのアイデンティティの重層性から論じられている。タック(Jason Tuck, Ch.7)は、ラグビー・ユニオン(rugby union は rugby league とは異なる)とナショナル・アイデンティティ・ポリティクスについて分析しており、「『想像された』ケルティック・ネーション」から「現実」に統一のアイルランドチーム(All-Ireland)を形成される際のスポーツの果たし得た役割について論議している。タックは、All-Ireland がグループ・カリスマの変容、I/we, us/them のアイデンティティ関係の複雑さに寄与しているとしている。同じように、ベアナー(Bairner, Ch.10)は、アイデンティティ構築には重層性があるとし(例えば nationality, national identity - Britishness, Ulster Unionist Ulster Protestant - 以外に、ジェンダーやエスニシティ等)、アイルランドにおけるスポーツは特に、政治的分断性を持つために、その重層性が更に複雑さを帯びることを論議している。また、アイルランドと親密な関係を持つマンチェスター・ユナイテッドで「英雄視」される北アイルランド出身の George Best とラグビー・ユニオンの選手を事例として取り上げ、「彼ら」のスポーツであるサッカー

やラグビー・ユニオンを通して、共通のアイデンティティを形成することの意味を説いている。

第 3 部ではアイリッシュスポーツに関わる諸論点を議論する論文が集められ、本著の包括的性格を象徴するような多彩な論点が提示される。例えばカーターは、グローバリゼーションの議論と British、アイルランド共和国の政府の移民規制との関わりから、アイルランドへのスポーツ移民(Ch.12, Thomas Carter) を取り上げている。ここでは移民を排出する国から移民を受け入れていく国(もしくは地域)へとアイルランドが変容する状況をふまえ、そのもとで「純粋な」アイルランド人とは何か、という問いがなされている点で面白い。だが、EU 加盟、さらには統一通貨加盟以降、「ケルティック・タイガー」と呼ばれる経済発展を経験し、アイルランド全体の変質に伴い、それに対する小さな(忘れられた)コミュニティからの抵抗等(アイルランドではアンティ・セミティズムや人種差別が根強く残っている)も論点に入れると、グローバリゼーションとローカリゼーションの対抗を更に描くことができたようにも思われる。またリストンの章は、今までマスキュリニティを中心としたアイリッシュ・スポーツの研究にジェンダーの視点を入れ、アイルランドの女性のスポーツに焦点を当てている点で新鮮である(Katie Liston, Ch.13)。また、日本でも良く知られ、ベアナーの友人でもあるジョン・スグデンの寄稿が最終章にある(John Sugden, Ch.14)。2000年から3年間委託されたイスラエルにおける“World Sport Peace Project”に直接関わったスグデンが、その経験に基づき、北アイルランドや中東地域のような「紛争地域」において、スポーツが平和構築に果たす役割を説いている。アカデミックな論文ではないが、スグデンの「何もしないということはもう既に選択肢にはないのだ」という訴えは、現在 power-sharing として北アイルランド和平プロセスが実現してきている過程で、新しい市民文化・社会を構築することが困難である、という悲観的現実と皮肉にも矛盾しているようだ。

さて大要このような著であるが、この著は大学のテキストとして使用するのも難しそうである。ベアナー博士もその点は意図的であり、「アイルランドの政治・歴史・文化を良く把握し理解している人を対象とした文献である」と述べていた。確かに、内容は細かく奥深い部分が多いので、単純明快なテキストとして用いることは難しいが、ある章を参考にし、更に大きな枠組みに違うコンテキストを当てはめて使うことが可能であると思われる。むしろ本著は、スポーツと「日本人」としてのアイデンティティとの関係を論ずる際に、同様な問いや章立てを有用することができる点に意味があるだろう。冒頭に述べた、本著を貫く「アイルランドとは何か?」、「アイリッシュとは何を意味するのか?」というパワフルな問題提起は、歴史的に分断されてきたアイルランドが、EU 拡張とグローバリゼーションの波に巻き込まれていく中で、益々重層化してきている。いずれにせよ、ナショナル・アイデンティティとは、「我々は何であるか」というよりも、「我々は何々ではない」といった、人々は「他者」に対して排除的な見方をする方が強いのだということ意識させられたのが、このベアナーの新刊であった。

【新刊情報】

荒川和民著「スポーツ文学評論」新風舎 (2005年2月刊行)

荒川和民(スポーツライター)

近年まで、スポーツには「闘争」と「娯楽」の両面があるとされてきた。しかし、現在では、人間の生活とスポーツの関わりを探求しようとする新しい動きも出てきた。そうした潮流の中、本著では、今一度スポーツの本質について見直そうとする試みである。本著は「闘争」、すなわち勝つことの醍醐味とそのための条件整備に力点が置かれる。勝負とはつまるところ結果に尽きるとはいえ、そこに至る過程でアスリート(選手)および関係者(監督、コーチ、企業のオーナーまでを含めて)のコンビネーションの影響が大であることを強調し、その根拠を28冊の書籍から探っている。

例示されるスポーツは様々であるが、選手個々人はもとより、監督・コーチ、さらには選手を取り巻く人々と、人的環境へと敷衍しながらスポーツの本質を見極め、総合型地域スポーツクラブのメリットについて論及している。企業スポーツの危機がクローズアップしてきた現在、小・中・高校生を一貫して指導しながら、社会人スポーツを再生しようとする総合型地域スポーツクラブの試みに、本著は注目している。

本著は、四章の章立てで構成されている。本著においては、スポーツ文学を通じて、現代スポーツの諸相を探索し、最後に、総合型地域スポーツクラブの可能性を探ろうとするものである。第一章は「時代の変遷とスポーツ」である。時代とともにスポーツも変容してきた。高度経済成長期と禁欲主義的スポーツ、バブル経済全盛期と消費文化としてのスポーツ、そして、バブル崩壊後の不況にあえぐ経済期における現代スポーツである。こうした変容するスポーツにおいて、スポーツマンは如何にスポーツに対して内なる渴望を抱き続けることができるのであろうか。本章においてその根拠を西村論文に求め、心理学で言う「強化」の重要性を説いている。また、消費文化としてのスポーツがヘゲモニーを握っている現代において、スポーツは軽薄化され、商業主義化されている。こうした派手やかで目移りしやすい環境において、スポーツマン個々人が内なる渴望を抱き続けるためには、グラムシのいう社会集団というスケールでの異議申し立てが最も必要であることを本章で強調している。

第二章は「トップ・アスリートたちの様相」である。サッカーの都並敏史、中田英寿、川口能活、小野伸二、小倉隆史、卓球の荻原伊智朗、バレーボールの斉藤真由美、大阪体育大学ラグビー部、サントリーラグビー部、慶応大学ラグビー部、早稲田大学ラグビー部、プロ野球スカウトの木庭教、片岡宏雄、自転車競技のランス・アームストロング、神奈川大学駅伝ランナーの例を探求している。彼らは皆、内から湧き出る渴望をもとにした技術の習得、記録の向上、相手との勝負という相克性の性質と、人とのつながり、すなわち常に開かれた存在であるという相乗性の性質を見事に超克している。そこには心理学で言う「強化」がうまく働いているといえる。特に、慶応大学ラグビー部は、政治の色を払拭しようと「地獄の山中湖合宿」を敢行したという社会への異議申し立てをしていた。

第三章は「スポーツのアウトローの様相」である。スポーツのアウトローたちは、個々人の能力と

アイデンティティの問題、非情ともなる才能や時の運、そして人間の業に翻弄されていく。スポーツのアウトローたちの諸相を前に、人間存在が秘める宿命ごとき何物かが、期せずして想起される。元巨人軍の栄村は、将来の巨人の四番を打つであろう吉村に重傷を負わせ、自らの心に深い傷を負った。その栄村にとって、現在、家族の存在がどれほど大きな支えになっているか推し量ることはできない。西宮西高校の教師、脇浜は、定時制高校という生徒の気質が難しい状況にありながら、ボクシングというスポーツを通して生徒たちに触れ合おうとした。必ずしもうまくいくとは限らなかったが、ボクシングによって何らかの変化が生徒たちの生活に及んでいた。元巨人軍の投手、湯口は、巨人軍の徹底的な管理主義と個の喪失といったスポーツの体質に埋もれてしまった。しかし、湯口が「巨人」というブランドに引き寄せられ、そこで活躍する自分の姿を夢見ていたからには、こうしたケースによってスポーツの「神話作用」が働いていたと分析されても仕方がないことなのかもしれない。プロボクサーのカシアス内藤も、興業主義の一発勝負という神話作用に踊らされた一人である。結局、負けるべくして負けてしまい、引退することになる。しかし、内藤は50歳を過ぎててもオリンピック選手くらいならなれるだろうと頑なに信じ、結局は「行き過ぎた人間」に成り下がっていた。オリックス・ブルーウェーブのスカウト、三輪田は沖縄水産高の新垣投手の獲得交渉の際に、裏金一億円という巨額な数字に押しつぶされ、自殺した。三輪田は、企業社会の冷酷さに反感を持っていたのかもしれない。そして、沖縄水産高の新垣投手の入団交渉の際には、福島商の三浦投手を「球界の玉三郎に育てます」と、明大との獲得競争に勝ったものの、平凡な投手に終わらせてしまった過去が影となって心を覆ってしまったのかもしれない。マラソン・ランナーの早田は、自分自身と向き合うことなく、周囲に不満を持つタイプの人間のため、所属先を転々とした。現役を引退後には社業に専念している。現役時代のことを自分自身で内省していれば、その後の人生に大きなプラスになる可能性は十分にある。

第四章は、「企業スポーツから地域スポーツクラブへの変貌」である。現代スポーツにおいて、どの企業も不況のあおりを受け、次々とスポーツクラブを手離す傾向が強い。かつて、日本選手権でV7を達成した新日本製鉄釜石製鉄所ラグビー部も、その例外ではなかった。その後、釜石ラグビー部は、釜石シーウェーブと名称を変更し、地域密着型のスポーツクラブを目指し、現在では釜石市の総合型地域スポーツクラブの目玉となっている。2004年には徐々に日本選手権に出場し記念すべき1勝をあげた。それまでに、釜石のラガーたちは「釜石」というアイデンティティを巡って様々な葛藤を経験した。

また、総合型地域スポーツクラブは、企業スポーツの危機を救う窮余の一策として受け取られるが、そのメリットも大きい。たとえば、学校教育というスパンで考えても、小・中・高校生は進学するたびに大きく環境も異なってしまう、指導者も変わってしまう。それによって、児童・生徒たちは大きな影響を受けていることは確かであろう。しかし、総合型地域スポーツクラブでは一貫した指導がおこなえる。確かに、まだまだ総合型地域スポーツクラブには課題も多い。しかし、スポーツ界がそれに寄せる期待も大きいことも確かであろう。

最後になったが、筆者自身、現在スポーツライターとして活動している。本著に関する忌憚のないご意見・ご批判をいただければ幸いである。

マスターズ甲子園2004報告概要

夢、続投。
長ヶ原 誠
(マスターズ甲子園2004実行委員長、神戸大学助教授)



元高校球児の夢再び。永遠のフィールド・オブ・ドリームス 「マスターズ甲子園2004」 11月28日(日)に開幕 ～全国132校から379名の高校野球OB/OGが集結～

甲子園出場を果たせなかった元高校球児の夢の実現を目指す、大人の甲子園大会、「マスターズ甲子園2004・第1回記念大会」が、平成16年11月28日(日)に阪神甲子園球場で開幕しました。「マスターズ甲子園」は、全国の高校野球OB/OGが、性別、世代、甲子園出場・非出場、元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を越えて出身校別に同窓会チームを結成し、全員共通の憧れであり野球の原点でもあった「甲子園球場」で白球を追いかける夢の舞台を目指そうとするものです。第1回記念大会は野球界が大きく揺れ動いた2004年にプレーボールとなりましたが、今後は日本の「フィールド・オブ・ドリームス」として全国200万人と推計される元高校球児のハートを再燃させ、全国各地のOB/OG野球チームの始動と生涯スポーツとしての野球文化の発展、さらには活力ある熟年(マスターズ)文化に寄与していくことを目指しています。

今回の第1回記念大会では、OB/OG野球の先進地域の紹介と、できるだけ多くの元高校球児や関係者の方々に憧れの球場を体感して頂くため、千葉県、山口県、愛媛県、熊本県の各地区予選大会(総勢82校)による選抜・優勝校同士の「選抜記念試合」、全国から応募・抽選されたチームによる「抽選特別試合」や「甲子園シートノック」、そして高校野球OB/OGパートナーとの「甲子園キャッチボール」を企画しました。これらのプログラムに31都府県の132校から、最高齢は75才から最年少19才まで、総勢379人が参加しました。当日は試合出場プレーヤーの熱闘もさることながら、マスターズプレーヤーの円熟味あふれる「熱闘」試合、高校野球時代の懐かしさが漂うシートノック、かつてのチームメイトや他校のライバル、兄弟、親子などの夢のペア参加によるキャッチボールによって感動と興奮が甲子園球場全体を包み込みました。また過去に高校野球甲子園大会へ参加したプラカード係、司会・アナウンサー、合唱団等のOBやOGが閉開会式をサポートし、スタンドでは各出場校の卒業生が応援を行い、グラウンド上と同様、世代を超えた甲子園同窓会が繰り広げられました。

本大会は継続開催を目指し、「甲子園」というかつての夢舞台の復活によって全国の元球児にアピールし、OB/OG野球の発展、さらには高校生を含めたユース野球へのエールを送るイベントとしても発信していく予定です。継続的開催を目指して、大会前日27日には、全国200万人と推計される元高校球児の組織化を目指す全国高校野球OBクラブ連合が第1回大会参加校を中心に発足しましたが、今後はこの母体を中心に「甲子園」出場に向けてさらに多くの地方大会が開催され、全国的にOB/OG野球文化が開花していくことを願っています。



大会概要



- ・主 催 : マスターズ甲子園2004実行委員会
- ・後 援 : 全国新聞社事業協議会、朝日新聞社、(財)笹川スポーツ財団、
(財)日本スポーツクラブ協会、兵庫県、兵庫県教育委員会、西宮市、
西宮市教育委員会、千葉県高等学校野球OB連合会、
山口県高校野球OB・OG会、愛媛県高校野球OB連盟、
熊本県高校野球OB連盟、神戸大学発達科学部
- ・特別協賛 : 株式会社アシックス 株式会社ジェイ・ティー・ビー
- ・協 賛 : 大塚製薬株式会社、株式会社アイパワースポーツ、株式会社リョーイン、
株式会社フォトクリエイト
- ・期 日 : 平成16年11月28日(日)
- ・会 場 : 兵庫県西宮市・阪神甲子園球場
- ・プログラム: 開会式、県選抜記念試合、抽選特別試合、甲子園シートノック、
甲子園キャッチボール、閉会式
- ・前日プログラム: 全国高校野球OBクラブ連合設立総会・
マスターズ甲子園20024前夜祭(会場:ノホテル甲子園)

マスターズ甲子園2004データ

地区予選大会
 千葉県(29)、山口県(11)、
 愛媛県(8)、熊本県(36)、計84チーム
 全国大会
 ~特別選抜試合~
 4チーム 140名(男性139名,女性1名)
 ~抽選特別試合~
 2チーム 59名(男性58名,女性1名)
 ~甲子園シートノック~
 3チーム 62名(男性62名)
 ~甲子園キャッチボール~
 58ペア 116名(男性113名,女性3名)
 ~合計~
 377名(男性372名,女性5名)



学生によるプレーヤーインタビュー調査(n=88)-

ボランティア:	約480名 審判員、プラカード係、アナウンサー、高校プラスバンド、部警察音楽隊、高校・大学野球部、少年野球チーム、など
観客:	約600名(観戦者名簿記入者527名)
テレビ取材:(大会前)	熊本朝日放送, サンテレビ, 愛媛朝日テレビ, テレビ愛媛
(大会当日以降)	NHK松山, 熊本朝日放送, 関西テレビ, サンテレビ
新聞社:(大会前)	延べ記事数 73 (34社)
(大会当日以降)	延べ記事数 86 (21社)
当日取材新聞社:	共同通信社, 朝日新聞社, 読売新聞社, 神戸新聞社, 愛媛新聞社, 日本スポーツ出版社, 防長新聞社, 日刊スポーツ, 報知新聞社, デイリースポーツ
大会ポスター掲載:	500枚(第1版A2サイズ), 50枚(第2版A3サイズ), パネル2枚
大会ガイドブック配布:	2700部(当日200部販売)
掲載雑誌:	5雑誌(ベースボールマガジン, 日経マスターズ, トリムジャパン等)
ホームページ (ページ提供)	元プロ野球選手(22人)からの応援メッセージ 大会関係者・参加者へのインタビューコメント、等
大会ホームページ:	延べ訪問件数 72,162件



1．地域スポーツ資源と密着した地域連携プロジェクトとして

兵庫県の重要なスポーツ文化資源である「野球」とその舞台である「甲子園球場」に注目し、全国に200万人以上とされる元高校球児を対象として、彼らの過去の憧れであった甲子園球場でのプレイを成人期以降の夢の舞台として復活させ、各個人の「回帰」、「再起」、「復活」をテーマとしたマスターズ野球同窓会イベントを実現していきます。この種の事業は産、官、あるいは民主導では開始あるいは継続は困難であり、その始動・運営母体として、これまでスポーツ文化の創造・発信において重要な役割を果たしてきた「大学」が率先的に理想を掲げ運営体制を組織化し、開催地元の産官民の団体・個人との連携を図りながら、今後の高齢社会において新しい生涯スポーツの形態として注目されているマスターズスポーツ文化の創造と発信にチャレンジしていきます。

2．大学主導・発信プロジェクトとして

兵庫県はスポーツ文化、野球文化、健康文化、ボランティア文化、復興・復活文化、等のマスターズ甲子園の理念に通じる歴史的背景や文化的資源を有しています。また、スポーツ発祥地としての伝統県であり、その地元の最高学府機関である神戸大学もサッカーやバレーボールに代表される種々のスポーツの発信基地・普及機関として新しいスポーツ文化を広めた過去の歴史と実績を持っています。本事業は兵庫県と神戸大学が誇るそれらの伝統を継承・復活させ、兵庫県・神戸大学の主導による産官民学共同という構図の元、地域の住民を含めた個々人のスポーツにおいてもその再起と復活を支援する地域モデルプロジェクトを目指しています。

3．夢復活・夢続投型の生涯スポーツ振興プロジェクトとして

加齢に伴いスポーツの夢・華舞台は減少すると言われていています。日本には甲子園を含めスポーツのメッカが数多く存在しますが、高校や大学でその夢舞台は途絶えてしまいます。本事業は夢復活・夢続投型の生涯スポーツ振興への試みです。夢を見続ける年輩のスポーツ参加者は成人・中高年のスポーツ参加の啓発に対し最も影響力のある役割モデルであり、青少年に対しても良き生涯スポーツの教育的機能を果たすと信じています。

夢、続投。

スポーツ文化創造学としてのマスターズ甲子園の試み



4. 「ささえる」スポーツ文化の活性化プロジェクトとして

本事業は単に「する」スポーツ文化の促進に止まらず、運営母体としての「ささえる」スポーツ文化の振興にも注目し、地域の産官民学共同事業による組織的連携、地元のボランティア組織や高校・大学のOB・OGの人的・情報交流の復活や活性化を促していくことを目標としています。

5. アクションリサーチを通じた実践的教育プロジェクトとして

これまでの「学」としての生涯スポーツ科学は、スポーツ振興を目標としながらも振興理論の体系化や、振興を実際に試みるアクションが少なく、大学教育においても共通の目標を掲げ教員・学生、そして地域の人々との交流の中で計画・実践・評価を進めていく地域を舞台としたアクションリサーチは発展途上にある。本事業は産官民学の人的交流に基づき教員と学生が一体となった実践的教育や相互教育を目指している。

MASTERS 甲子園

11月28日プレイボール

夢、続投。

甲子園を目指した
200万の元球児へ!!

www.masterskoshien.com

マスターズ甲子園
2004

主催：マスターズ甲子園2004実行委員会
後援：全国新聞社事業協議会、朝日新聞社、(財)豊川スポーツ財団、(財)日本スポーツクラブ協会
兵庫県、兵庫県教育委員会、西宮市、西宮市教育委員会

MASTERS KOSHIEEN

2004北米スポーツ社会学会 (NASSS)

鹿屋体育大学 北村 尚浩

はじめに

2004年北米スポーツ社会学会 (North American Society for the Sociology of Sport) が、11月3日から11月6日の4日間にわたって、アリゾナ州ツーソン市のマリオット・クユニバーシティパークで開催された。第25回の記念大会となる今回は、「学際的対話 (Interdisciplinary Dialogues)」をメインテーマとして、200を超える発表が行なわれた。シルバー・アニバーサリーを記念して受付には歴代会長のポートレートが展示され、筆者が在外研究でお世話になったバリー・マックファーソンの写真を見つけ、20年以上も前に彼がスポーツ社会学の最前線でいたことに改めてその功績の偉大さを感じた。

筆者にとっては、これが2回目、しかも前回の参加は1996年にカリフォルニア州サクラメントでの大会であるから、かれこれ8年ぶりの参加であった。また、カナダのモントリオールで開催された昨年の大会は、大学院生を中心に日本からの参加者も多く見られたようであるが、今年はツーソンという場所が災いしてかどうか日本からの参加者は筆者一人であった。



写真1 初代会長のアンドリュー・ヤンキースと2代会長のバリー・マックファーソン

200を超える演題数

とにかくセッションの多さに圧倒される。同じ時間帯に4~7のセッションが行なわれており、3日間で200を超える一般発表がなされた。主なセッション・テーマを表に挙げておくが、その40を超えるセッション・テーマの広さには驚かずにはいられない。

ともすると日本では忘れられがちな社会階層や人種問題など、まさに社会の中でのスポーツ・シーンに見られる様々な現象をトピックとしたセッションが多く、社会のダイナミクスを感じずにはいられなかった。

表 主なセッション・テーマ

人種差別的空間: スポーツ、人種と国家	身体文化
同性愛とセクシャルハラスメント	スポーツ批判: マルクス主義との関係
スポーツ研究と都市研究	スポーツと政策
コミュニケーションとしてのスポーツ	スポーツ、文化と広告
権力、性とメディアイメージ	スポーツの民俗学的研究
大学スポーツ	スポーツ、社会資本と階層
スポーツとセクシャリティ	スポーツと健康
スポーツと国家	動きの視覚的経済: スポーツと映像
スポーツと障害者	スポーツ組織とジェンダー

筆者の発表は、「多様な世界や特別な場所におけるスポーツとレクリエーション (Sport

and Recreation in Diverse Global, Special and Institutional Sites)」というセッションにアサインされていた。このセッションでは、カナダのウィンザー大学のコートニー・メイソンが、「グレンガリーゲーム：農村コミュニティにおける文化的再生産と政治的独自性 (The Games of Glengarry: Cultural (Re)production and Identity Politics in Rural Communities)」として、1948年からカナダ・グレンガリー郡で行なわれているスコットランドの伝統的な「ハイランド・ゲーム」を通して、カナダの農村にいかにしてスコットランドの文化が伝承され広められたか報告した。

続くウォルバーハンプトン大学 (イギリス) のケイ・ビスコンの発表、「アイデンティティ物語 (Stories of Identity)」は、体育・スポーツを専攻する学生のアイデンティティ (自我同一性) が確立されるプロセスを、各個人の経験を物語として書き起こすことを通して明らかにしようとした試みで、興味深い内容であった。

筆者は「日本の地域における週末のスポーツプログラム (Weekend Youth Sports Programs in Japanese Community)」というテーマで、学校 5 日制と地域での青少年スポーツプログラムについて報告を行なった。今になって思えば「in Japanese Community」という表現を使っていたことが、このセッションにアサインされた大きな理由であるような気がする。それはともかく、このセッションへの参加者の興味、関心はさほど高くなかったようで 10 名ほどのこぢんまりとしたセッションとなった。

筆者がざっと見てまわった感じとしては、ジェンダー論や人種問題に関連したセッションに多くの聴衆が集まっており、彼らの関心の高さがうかがえた。また、研究の方法も統計的な分析からの推論よりも、現象を質的に捉えて一つ一つを事例的に掘り下げていくようなものが、多かったような気がする。原則的に会場には液晶プロジェクターが設置されておらず、日本では当然のように用いられているパワーポイントを使った発表が少なかったこともまた、新鮮 (実は迷惑!?) であった。

キーノート、ワークショップ

大会期間中、毎日一つはキーノートアドレス、あるいはワークショップなどが開かれていた。初日には「北米の国境地方における人権 (Human Rights in the North American Borderlands)」と題したプレカンファレンスシンポジウム今年のテーマを引き継いだ形で開かれた。

2 日目に開かれたワークショップは、大学院生のコーディネートで「出版者との協議 (Negotiating the Publication Terrain)」をテーマに、The Sociology of Sport Journal (SSJ) と The International Review of the Sociology of Sport (IRSS) のエディターを交えて、ジャーナルへの投稿に焦点を当てたディスカッションが持たれたようである。また、Take a Student to Lunch on といった催しもみられ、学会を挙げて大学院生の教育に力を入れている様子が伝わってくる。

最終日のパネルディスカッションのテーマは大会のメインテーマでもある「学際的対話:(ポスト)アイデンティティとスポーツ (Interdisciplinary Dialog: (Post) Identity and Sports)」であった。ベン・カリントン(テキサス大学)、リチャード・グラニュー(サイモンフレーザー大学)、オセロ・ハリス(マイアミ大学)、マーガレット・マクニール(トロント大学)が、学会が設立されてからの25年間にわたって議論されてきた、スポーツの領域内外におけるアイデンティティと差別について、それぞれ政策論、ロマン主義、メディア論の研究領域から発表した。さすがに、この頃になると「ホモ」とか「レズ」、あるいは「白」と「黒」といった単語が耳につくようになり、時差ボケが抜けきらない頭には非常に堪えた。



写真2 基調講演

おわりに

会場となったマリOTT・ユニバーシティパークは、アリゾナ大学のすぐ近く位置していた。せっかくなのでキャンパスでも見て回ろうと大学のインフォメーションをのぞくと、ちょうどバレーボールの試合の開催日であった。NASSS のレセプションと重なっていたが、筆者の英語力と大学スポーツへの関心からレセプションは諦め、バレーボール観戦に出かけることにした。

アリゾナ大学では、アスレチック・デパートメントとスポーツマーケティング・アソシエーションとが協同してホームゲームを運営している。大学チームの試合はネット (<http://www.arizonaathletics.com/>) で中継され、視聴料を支払えばネット観戦も可能である。スタッフを見る限りは学生が多く携わっているようで、スポーツマーケティングの実践の場として、大学スポーツが活用されている事がよく分かる。

オレゴン州立大学とのゲームは3-0でアリゾナ大学の勝利となったが、大学の代表として出場している選手たちや会場に集まったアリゾナ大学のサポーターたちの姿を見ると、同性愛や人種といったトピックが、北米の学会で往々にして取り上げられている理由がなんとなく理解できたような気がする。そういえば、筆者がツーソンに到着した日は、100kmほど離れたフェニックス市でサンズの田臥選手が華々しくNBAデビューを果たした日でもあった。

2005年はノースカロライナ州・ウィンストン・セーレムの アダムズ・マークホテルで10月26日から29日にかけて開催される。



写真3 アリゾナ大学大応援団

編 集 後 記

今月末に東京で開催される第 14 回学会大会への参加申し込みはお済みでしょうか。新しい試みのバズセッション、研究委員会が昨年度から取り組んでいる課題研究「スポーツと表象」のセッション、若手研究者懇談の集い、また一般発表の中にも興味を引くものが沢山あります。2005 年 6 月に発行予定の次号会報は、第 14 回大会の特集号となります。学会大会の感想がありましたら、[doc@jsss.jp]までお送り下さい。また、併せて新刊情報、海外研究通信、海外学会報告、研究会情報、研究活動通信等の原稿も、どしどしお寄せ下さい。5 月中旬までにファイルを送って下されば、会報 41 号に掲載させていただきます。

では、東京の大塚で、会員の皆様にお会いできますことを楽しみにしています。(T.Hide)

学会への連絡、入退会、住所・所属・メール等の変更、会費納入、その他の各種手続き

〒612-8522 京都市伏見区深草籐森 1 京都教育大学気付
日本スポーツ社会学会事務局 杉本厚夫【事務局長】
TEL: 075-644-8283 FAX: 075-645-1734
E-mail: secretary@jsss.jp
(郵便口座番号) 00390-0-43962
(加入者名) 日本スポーツ社会学会事務局

会報への投稿

〒630-8528 奈良市高畑町
奈良教育大学
高橋豪仁【会報担当】
E-mail: doc@jsss.jp

学会公式ホームページ

日本スポーツ社会学会公式ホームページ
<http://jsss.jp/>